

---

# 空になれないのなら

大森ろら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空になれないのなら

### 【Nコード】

N5656Q

### 【作者名】

大森ろら

### 【あらすじ】

急死した引きこもりの姉が幽霊となって家族の前に現れた。妹の視点から描く、静かに壊れゆく家族の姿。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。

<http://rorarikidane.com/>

瓜ざね顔で背が高く太っていた姉さんはいじめを受けて不登校になりニートになった。

学校に行かなくなったのが十歳の時で、それから二十五歳で死ぬまでの十五年間家からほとんど一歩も出なかった。

ある初夏の夜、夕飯だと母親が呼びにいったら姉さんが自分の部屋の床にうつ伏せで倒れて死んでいた。死因は心不全だった。心臓が突然動くのをやめてしまったのだ。太っていたが、持病があるわけではなかった。それはいわゆる突然死だった。

わたしは姉さんの死を友人たちとの飲み会の席で知った。携帯電話から聞こえてくる母親の言葉がそのまま反対側の耳から抜けていき、わたしは無音の世界に一瞬にして飲み込まれた。

姉さんが死んだと聞いたとき、本当に驚いた。それはとても突然だったからだ。でも正直、全く悲しくなかった。むしろ、ほっとした。しかたないんだとおもった。姉さんには未来がなかった。それは家族みんなが心のなかでおもっていたことだった。だから、こうなっただけで良かったような気さえした。もう姉さんのことで頭を悩ませる必要はない。外で遊んでいても勉強をしても、いつも頭のすみっこで黒い靄のように自己を主張していた姉。それが消えた。なくなった。

姉さんがいなくなって困るひとはいなかった。世界中のだれも。

初七日が過ぎ、わたしたちは普通の生活を取り戻しつつあった。

「イチコの部屋を片付けないとね」と夜、バラエティ番組を見ながら母が言った。

「姉さんの荷物はどうするの？」

姉さんの持ち物はほとんどなかった。外出しないので服も数着しかなかったし、靴も二足しかなかった。本は図書館で母が借りてきてあげていたので自分のものはほとんどない。姉が一日中いじって

いたデスクトップパソコンをのぞけば、姉の大切なものなど何もな  
いに等しかった。

「処分するわよ」

「全部？」

「とっておいてもしょうがないでしょう」

「パソコンも？」

「あなた使う？」

「自分のがあるからいらない」

「あなたはどうか？」

母が父にたずねた。父は夕刊から顔をあげずに、「いや」と言っ  
た。

「じゃありサイクルショップにもってくわ」

翌日、大学から帰ると、姉さんの部屋の扉が少し開いていた。興  
味をひかれて覗いてみた。姉さんが生きている時はけっして中に入  
ることはなかった開かずの間。しかしそこはいたって普通の部屋だ  
った。パソコンとテレビとCDラジカセが床においてある他は何も  
なくなっていた。カーテンも絨毯もなくなっていた。窓は開け放さ  
れ、清々しい風がわたしの顔に吹きつけた。そこはもはや姉さんの  
部屋ではなかった。

わたしはそっと扉を閉めてキッチンに行った。喉が渴いていた。

確かポカリスエットが残っていたはずだ。

「あら、モエコ、帰ってたの」

うん、と返事をしながら冷蔵庫を開けてポカリスエットを出した。  
ペットボトルのまま飲むと、「やめなさいよそういうの」と母が嫌  
そうな声で言った。わたしは無視をした。と、目があるものにとま  
った。冷蔵庫の上に見慣れぬ物が置いてある。

それほど大きくはない。両手のなかにちょうどおさまるぐらいの  
大きさ。カラフルに色づけされており、壺のように見える。不恰好  
な蓋も一応ついている。

「どうしたのこれ」

わたしの問いかけに母は冷蔵庫の上を見て「ああ。それ、イチコが作ったのよ」と言った。

「姉さんが？」

「覚えてない？ イチコがまだ小学校に通っていた時に図工の時間に紙粘土で作った砂糖壺よ」

「砂糖壺」

「部屋を片付けてたら出てきたの。懐かしいなおもって」

「処分しなかったの？」

「だって、なんか可愛いじゃない」

「そう？」

母は砂糖壺を手にとると、ほうら、とわたしの顔の前に突き出した。わたしはのけぞって顔をしかめた。なんとなく触れるのがためらわれ、わたしはポカリスエットを冷蔵庫に戻すといそいそと自分の部屋に退散した。

その夜だった。

姉さんが現れた。夕食を食べ始めると、姉さんが普通に部屋に入ってきて自分の椅子に腰をおろした。

わたしは目を見開いた。母を見ると、母も目を見開いていた。父も目を見開いていた。そうして、わたしたち三人は目を見合わせて、目で無言の会話をし、何もなかったかのように食事を続けた。姉さんは見えない食事を黙々と食べていた。

その夜から姉さんは普通にわたしたちと暮らし始めた。体は透けていたけれど、それ以外は前と変わらなかった。何も喋らず、まるで空気のように、生暖かい風のように、わたしたち家族の間をすると動き回った。

しかし今の姉さんは生きていたときの姉さんとは違った。なにによりわたしたちを不安にさせなかった。むしろわたしたちは姉さんに寄り添うようになっていった。母は姉さんを相手に無駄話や近所の人の悪口を言い、父は誰も笑ってくれないギャグや冗談を姉さんに聞いてもらった。わたしは恋人にひどいふられ方をし、姉さんの前

で泣いた。

ごく自然にわたしたち家族は透けた姉さんを受け入れていった。生きているときはあんなに姉さんを受け入れることが困難だったのに、今の姉さんならそれができるのだった。姉さんに話しかけ、問いかけ、微笑みかける。

「どうして姉さんは戻ってきてくれたのかな？」

ある日わたしは母にたずねてみた。

「わたしたちのことが心配だったのよ」

姉さんがわたしたちのことを心配する？

考えも及ばないことだった。

しかしよくよく考えてみると、そういうことなのかもしれないかった。

姉さんがいたとき、そして死んだあともずっと、わたしたち家族は心に空洞を抱えていた。ひょおひょおと、そこを通る風の音が聞こえた。それをふさぐ術をわたしたち家族は知らなかった。

姉さんがその空洞を作ったのではない。その空洞は元々わたしたちにあったものだった。自分たちが作り出したものだった。

姉さんはそれを知っていて、心配して戻ってきてくれたのだ。

「なるほどね」

姉さんはわたしたちの空洞がふさがるまで、ずっとそばにいてくれるのだ。

そう、腑に落ちた矢先のことだった。

姉さんが消えてしまった。忽然と。

どこへ消えた？

わたしは気が動？した。

すると父がわたしたちに教えてくれた。

「イチコは砂糖壺のなかにいる」

姉さんが冷蔵庫の上にある砂糖壺のなかにすううつと吸い込まれるところを父が目撃していた。

「でもなんで？」

砂糖壺を囲んで、わたしたち家族は頭を抱えた。なぜ姉さんは突然砂糖壺のなかに引きこもってしまったのだろう。いったい、何がいけなかったのだろう。わたしたちはあのまま、うまくやっていけそうだった。わたしたちの体を通り抜ける風の音は小さくなりつつあった。なのはどうして。

そのとき、突然わたしの口が勝手に喋りはじめた。

「ねえ、覚えてる？　姉さんがベランダに出て空を見上げていたとき、母さん、注意したことがあったでしょ。『近所のひとに見られるからやめなさい』って。姉さんは外に出ようとしなかった。でも出たくなかったんじゃない。出られなかっただけだった。姉さんはいつも、自分の部屋の窓からそっと空を見上げていた。空の下に立つのが姉さんのささやかな夢だった。姉さんは空と会話し、空だけに許されていた。そんな空になってしまいたかった。空に吸い込まれて、消えてしまいたかった。姉さん、いつだって絶対泣いたりしなかったけど、その夜はベッドのなかでとても静かにずっと長い間泣いてたんだよ」

母は翌日、姉さんがはいった砂糖壺をベランダのクーラーの室外機の上に置いた。天気がいい日はいつもそこに置いた。母も父もわたしも、ベランダで過ごす時間が増えた。ただぼんやりと空を眺め、時折砂糖壺の蓋をあけては姉さんが出てこないかしらと思った。

空をそんな風に真剣に眺めたのは生まれて初めてだった。空は毎日違う顔を見せた。手を伸ばすと遠く、時折姉さんが悪戯したかのように指先が透けて空と溶け合った。

しかし、いつしかまた砂糖壺は冷蔵庫の上に戻って、そこから動かなくなった。

我が家族はひとり抜け、ふたり抜け、やがてばらばらになった。

姉さんの砂糖壺がいま何処にあるのかわたしは知らない。

姉さんがいま、何処にいるのかも。

わたしはいつも、何も知らない。

雨の音が聞こえる。

姉さん。今日は空から、雨が降っているみたいだよ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5656q/>

---

空になれないのなら

2011年5月11日19時40分発行